

《担当者名》飯泉智子

【概要】

言語聴覚障害学の各論のひとつである発声発語障害のうち、運動障害性構音障害、器質性構音障害について学ぶ。

【学修目標】

運動障害性構音障害、器質性構音障害とリハビリテーションについて理解する。

1. 運動障害性構音障害の特徴について説明できる。
2. 器質性構音障害の特徴について説明できる。
3. 発声発語の各側面（声、共鳴、構音、韻律）の評価方法を説明できる。
4. 神経学的検査の目的、方法について説明できる。
5. 感覚・運動、形態異常による発声発語の変化について列挙できる。
6. 発話明瞭度の評価方法を説明できる。
7. コミュニケーション障害の主要因を抽出方法について説明できる。
8. 運動障害性構音障害の介入方法の基本的な内容を説明できる。
9. 器質性構音障害の介入方法の基本的な内容を説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1) 4	運動障害性構音障害の概要	運動障害性構音障害の特徴	飯泉智子
5) 8	運動障害性構音障害の評価	基本的な考え方 神経学的検査 発声発語器官の機能検査 聴覚的印象による評価 その他の検査	飯泉智子
9) 15	運動障害性構音障害への介入	リハビリテーションの基本的な考え方 機能訓練の基礎知識 呼吸・発声機能の訓練法 鼻咽腔閉鎖機能不全の治療法 構音器官の訓練法 発話明瞭度の向上を目的とした訓練 ・発話速度の調整法 ・言語音の明瞭化に関する方法 補助手段、その他の介入法	飯泉智子
16) 19	器質性構音障害	器質性構音障害の特徴 評価 介入	飯泉智子

【授業実施形態】

遠隔授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

課題20%

定期試験80%

【教科書】

熊倉勇美 編著 「言語聴覚療法シリーズ9 改訂運動障害性構音障害」 建帛社 2011年

熊倉勇美 他 編 「標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第2版」 医学書院 2015年

藤田育代 他 編 「標準言語聴覚障害学 言語聴覚障害学概論 第2版」 医学書院 2019年

道健一 他 編 「言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学 第2版 器質性構音障害」 医歯薬出版 2016年

江藤文夫 他 編 「神経内科学テキスト 改訂第4版」 南江堂 2017年

【参考書】

Raphael, L. J. 他 著 廣瀬肇 訳 「新ことばの科学入門 第2版」 医学書院 2010年
岡崎恵子 他 編 「口蓋裂の言語臨床 第3版」 医学書院 2011年
廣瀬肇 他 著 「言語聴覚士のための運動障害性構音障害」 医歯薬出版 2011年
溝尻源太郎 他 編著 「口腔・中咽頭がんのリハビリテーション 構音障害、摂食・嚥下障害」 医歯薬出版 2000年
伊藤元信 他 編 「言語治療ハンドブック」 医歯薬出版 2017年
阿部雅子 著 「構音障害の臨床 - 基礎知識と実践マニュアル - 改訂第2版」 金原出版 2008年
廣瀬肇 監 「発話障害へのアプローチ - 診療の基礎と実際 - 」 インテルナ出版 2015年

【学修の準備】

解剖生理学、基礎人間科学、音声学、音響学、神経学、音声言語聴覚医学、耳鼻咽喉科学、口腔外科学などの関連基礎科目をよく復習しておくこと。(80分)
講義で提示された課題を解き解説を作成すること。(80分)

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

(DP2) 最新のリハビリテーション科学を理解し、保健・医療・福祉をはじめとするさまざまな分野において科学的根拠を有する専門技術を提供できる能力を身につけている。
(DP3) 言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

飯泉智子（言語聴覚士）

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関での実務経験を活かし、運動障害性構音障害、器質性構音障害のリハビリテーションに関する基本的知識および実践について講義する。